

「サロマ湖」(抜粋・編集) 永田トク

昭和20年代 永田のおじいちゃんの考えるサロマ湖の漁業と魚付保安林

常呂町高齢者教室『昭和62年度オホーツク大学文集トール』掲載

*注：永田トクさんの夫(永田実さん)が北見営林署員からインタビュアーを受けた

内容が「林友」という雑誌(北見営林署刊 昭和51年3月)に掲載され、それが「サロマ湖」という文の中で紹介。

永田実さんは、文中では「永田のおじいちゃん」と記述。

以下は「林友」掲載の文。

(略) 北見営林署は、このサロマ湖を舞台に、明治40年代からオホーツクの潮風、砂丘地、泥炭地に挑みながら保安林の造成を続けてきました。緑化は内陸森林地帯に比べて数倍の努力と地理的条件を克服する技術が必要なのです。

夏の間サロマ湖は、日に何千人という人が森と湖に憩いを求めて訪れます。この人たちの中で森林の生い立ちと役割を意識して見る人は本当に少ないのではと考えます。

サロマ湖「かき島」に漁業を営むかたわら58年間サロマ湖畔の森を眺め、森と共に生きてこられた当年72才(注：昭和51年当時)のおじいちゃんが語ります。

がっちりした体格でオホーツクの潮風で日焼けした顔、口ひげをたくわえ、威風堂々たる風貌からは何物にも屈しないという男らしさを感じる永田おじいちゃん。

どっしりと椅子に座るおじいちゃんの背後に、漁業組合、営林局、営林署の表彰状、感謝状が整然と飾られ、おじいちゃんの長年にわたる漁業組合員として、巡視人と森林組合の役員としてのご苦労とご活躍を深く感じました。

サロマ湖で育った森林が、永田おじいちゃんの生活を通してどんな役割を果たしてきたのかを一住民の立場で語っていただきました。艱難辛苦の50年を体験して今日の生活を築いたおじいちゃんは、息子さんに漁業を継がせ、好きな焼酎を口にしながらお孫さん相手に楽しい生活を送っています。

記録・広報係長

撮影・広報室員

*注：記録者・撮影者の氏名は略。

以下は、問の部分を「記録」、それに対する回答を「永田」で表記

記録：おじいちゃんの顔の色がとても元気そうですね、お年は。

永田：わしは72才だよ。

記録：生まれはどこですか。

永田：札幌の定山溪だ。

記録：おじいちゃんの年代の人は、北海道開拓で本州から渡ってきた人が多いんですが道

産子なんだね。

永田：そうだ。

記録：こっちに来たのはいつなんですか。

永田：8才（注：大正元年）の時だった。両親と留辺蘆町の瑞穂に小作人として来たんだ。

記録：ああ農業ね。昔は小さい頃から働いたんですか。

永田：父と11才で杣夫（そまふ）注：造材に従事する林業労働者で「やまご」と呼称）を始めた。

記録：11才の時？杣夫は林業の中では高度の技術を要して重労働ですよ。とても信じられん。

永田：本当だよ。14才で1人前の賃金をもらったよ。

記録：おじいちゃんは体が大きく、力があつたとしても自分自身の努力もたいしたものだったね。

永田：造材の山を務めたのは30才から。

記録：栄浦に来たのはいつ

永田：14才の時（注：大正7年）。夏は漁師、冬は杣夫で1年間働き続けたよ。漁師も18で独立したね。

記録：常呂の歴史を見るとサロマ湖周辺は魚貝類が豊富で、しかも寒さをやわらげる林が大地を覆い、オホーツク文化を築きあげた先住民族がここに安住の地を求めたと記されていますが、おじいちゃんの来た頃の栄浦はどうだったんですか。

永田：大昔のことは知らんが、魚貝は苦勞せずたくさんとれた。しかし漁をしても人がそんなに住んでいないし、交通は不便だったので買っていく人もなく、当時10数戸あつたが漁師だけではまったく不安定で生活していかれなくて、冬はわしのように造材などに出稼ぎにいったものだ。これでは家族を養っていけない、何度漁師をやめようかと思つたか。ようやく帆立の養殖が安定してきて、5、6年前から見通しも立てられるようになった。昔より楽しく漁ができるようになったが、性能の良い船や資材を買うので、他から見ると木がたくさんあつて、家の補修材として営林署から払い下げを受けて寒さをしのいだもんだ。本当に助かつたよ。

記録：おじいちゃんは24年に北見営林署長、29年には北見営林局長から長い間巡視人、森林愛護組合役員として貢献したと表彰されていますが、何年くらいやつたのですか。

永田：はつきり覚えてはいないが40年はやつたかな。その頃は営林署の人たちともつきあいが深かつた。管内営林署長会議を家の帆立番屋で開いたことがあつた。わしのつた生魚や貝を食べて大変喜んでもらったこともあるし、担当区員主任をはじめ、皆自分の家のように行き来したものだ。今では自家用材払い下げもなく、馬草を刈ることもなくなり、担当区へ行く用もなくつた。当時の署長がわしのボロ家を見て補修材を払い下げてやるから家を直せと言ってくれましたが、部落の世話役がそれではできぬと断つた。

当時、木はたくさんあつた。湖のそばまでカシワの木が生えていた。今の青年の家（注：現道立少年自然の家）あたりにはエンジュ原といって、エンジュの木がくねくねとした姿でたくさん茂っていた。その中を細道があり、浜佐呂間まで歩いて行き来したものだ。人が段々増えて宅地や畑になった。どんどん木は切られ、本

に寂しい気がするね。

痛恨事といえば「ワツカ盗材事件」だった。森林組合の役員として営林署主任や常呂駐在員らと事件調査応援に行った。戦後間もないできごとだった。樺太から引き揚げてきた人が住むところもなくワツカに落ち着いたのでしよう。そこに住み着いた人のやむにやまれぬできごとだったにしろ、サロマ湖の漁業のために営々と残してきた森だ。私情を捨ててわたりあった。つらい思いをしただけに深く印象に残っているね。わしはけがをさせられたり、新聞にも出たので、弟から電話が来て、なんで兄さんがやられたんだと言ってきたので、駐在員方に行ったおれが相手にけがをさせられるかと言った。

ワツカの森は網走国定公園の区域と共に、開道百年記念銘木林だ。なお、このサロマ湖の周りは日本で3ヶ所しかない魚付き保安林の1つなのだ。湖の周りに木がなくなると魚が寄りつかなくなり、魚の量も少なくなる。これは長い間の漁業経験として肌を感じてるんだ。湖の周りに林があることにより静かなサロマ湖が維持できるんだ。船の安全な航行もできたのだ。

この頃は性能の良いいろいろな機能が船についているから不便ではないだろうが、木は一度切ってしまうたら後はなかなか育たない。営林署で木を植えてみたこともあるが、潮風にたたかれて伸びることができない。先の方がほうきのようになっている。

営林局長がワツカに来たことがあった。わしは局長に言った。「他から持ってきた木を植えてもワツカでは育たんよ。牛馬を放して天然の力で生やしてはどうか」。その時、局長は信用してくれなかったようだった。だけど別れ際に「おやじ、やってみるか」と言ってくれた。さっそく馬を放し飼いにした。どうだい、3年後になったら馬の足跡からイタヤ、ナナカマドがたくさん生えてきてる。嬉しかった。

営林署長や担当主任に言った。「砂丘に木を植えるなら、その付近に生えてる天然の木をよく見て、同様の木でなければだめだと思うがね。学問的に深いことはわからないがね」。

記録：かなり進んだと言われる今日の段階の林業も、長い間の自然と体験の積み重ねできたもので、まったくおじいちゃんの話はごもつとも、敬服しました。最後にサロマ湖の森に希望がありましたら聞かせてください。

永田：わしは昔を知っているだけに、大変木が少なくなってきた。栄浦になければならぬ木だ。昔は邪魔もの扱いされた木であったが、今になってみれば、あそこは残しておけば良かったと言っても、海岸地帯だけに簡単にできない話だ。わしは山に入って生活したこともあり、山も木も好きなんだ。この頃栄浦にたくさん観光客が来る。しかし、漁業にはあまり関係のないことだ。これ以上木を切らんようにして欲しい。それから今以上に力を入れて木を植えて欲しいと思う。

記録：長時間、貴重な話をしていただき本当にありがとうございました。(略)